
鏡音の休日

昴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡音の休日

【著者名】

NZマーク

【あらすじ】

鏡音リンと鏡音レンのある日の休日を書かせていただきました。
少しですが鏡音の歌の歌詞を使わせていただいています。

登場人物の紹介？

知らない人がいるかもしれないのに念のため簡単な紹介です。

登場人物

鏡音リン…レンの双子の姉で高校一年生。とても明るく元気な性格。賭け事、競い事大好きでレン思い

鏡音レン…リンの双子の弟で同じく高校一年生。冷静沈着な方でりんの保護者的な存在。リン思い

初音ミク…リンレンのお姉さん高校三年生。運転免許を持つて。姉弟思いで優しく心配性

巡音ルカ…のお姉さんで二十歳位で優しく料理上手。世で言う出来の人

カイト…の四人のお兄さんでとても大人しく優しい。年齢は読んで下さる方のご想像にお任せします

メイコ…のお姉さんでお酒好きで人をからかうのが好き、カイトを常に心配している

ポーカー（前書き）

これは次話の前日の出来事です
リンレンのイメージを壊したくないという方
駄文は嫌という方は読まない方がいいかもしません
別に構わないという方は
どうぞご覧下さい

あとサブタイトルの通りリンとレンがポーカーをするので
ルールがわからないという方がいらっしゃれば　のサイトを参考
にして下さい

多少、ルールは変えていますが役を知つていれば大体大丈夫かと思
います。

変えたのはストート（トランプのマーク）の強い順があるとややこし
いので無しにしています。後は用語を使つていいだけだと思います。

<http://www.nintendo.co.jp/no9/trump/games/poker/index.html>

ポーカー

「……なあリン」「

「駄目」

自分の五枚の手札を見たままリンが言つ。

「まだ何も言ってないけど?」「

「言わなくてもわかる…どうせ自分の負けでいいからでしょ?」「

「よくおわかりで…」

リンは一枚を交換した。

(これ何時まで続くんだよ。もうかれこれ1時間になるぞ…)

こうなった原因は今から1時間程前の出来事…

明日は俺もリンも部活が休みで久しぶりの日曜

だから俺とリンは一緒に映画でも観に行こうかといふ話になつた。
そこまではよかつた。

「リンは何が観たい?」「

俺はインターネットで映画情報を見ながらリンに聞いたら

「えっと、バイオハザード?」「

「つー?」

正直、俺はそれだけは勘弁して欲しかつた。

理由はこの前、部活の友達とプレイしたバイオハザードのゲームが
とてつもなくグロくて気持ち悪かつたからだ。

銃で倒すと傷口からまるで寄生虫の様なもの（寄生虫なんだけど）
が出てくる。

本当に気持ち悪かつた…

それ以来バイオハザードが苦手になつてしまつた…

「…ン、レンつてば!」「

「えつー?…何?」「

「何?じゃないよ!何回も聞いたよ?」「

レンは何か観たい物あるの?」「

「えつ？れ…歴史系かな？」

ヤバい…声が震えてる（汗）

リンはこんな時かなり感が鋭いから絶対に気付く…

「どうしたの？さっきから…もしかして

レン、バイオハザード苦手？」

「そ、そりゃないけど…今度のテストに出される話だから…それに映画なら覚え易いし…」

「ふうん、苦手なんだ？」

「だからそうじゃないって…！」

「じゃあ何でそんなに必死なの？」

「…そんなに顔に出ていたどうか？」

俺が何も言わないと

「じゃあゲームで決めよ？」

手を合わせながらリンが言つてきた。

「え？」

「今からゲームをして私が勝つたらバイオハザード
レンが勝つたら他のを観る…これでどう？」

俺は少し考えてからその話に乗ることにした。

「…わかった、いいよ。で？何をするの？」

待つてました。と言わんばかりにポケットから青いトランプを出して

「ポーカーしよ？先に二点を差付けた方が勝ちで！」

と言つてきた。（何時の間にトランプ持つて来たんだ）

それから俺とリンの長い賭けが始まった…

それからどちらも勝つては負けて勝つては負けての繰り返し…そして現在に至る。

もうこの勝負が何回目なのかすらわからない…

今思えばあの時、素直に諦めてバイオハザードに決定していればよかつた…

俺はため息を吐きながら自分の手札のカード三枚を交換する。

俺の手札は、まあ悪くはない

リンは…微妙みたいだな

何故かわからないがリンは勝つ時は勝つ、負ける時は負けるで
中間が存在しない…それにリンのリボンを見ると少しは良いか悪い
かがわかる。

気のせいだと思つけど良い時はピョコピョコ跳ねているように見えて
悪い時はシヨンと垂れているように見える。

一体、あのリボンは何で作られているのだろ？

「俺は勝負するけど…リンは？降りる？」

「勝負する」

結果は俺が7ヒツのツウ・ペアでリンが4ヒツのツウ・ペア

「俺の勝ちだな」

リンは何も言わずトランプをキリ始める。

「リン、俺が諦めるの嫌なら今、俺もリンも同点だから
次のゲームで最後にしない？次に勝った方が勝ちで…」

リンはトランプを配り終えてから頷いた。

俺の手札は…キングのスリーカードにクイーンのワン・ペアのフル
ハウス

(最後にこんな役しかも最初から出来てる…嬉しいけど
こんな時に運を全部使つてないだろ？)

チラッとリンを見てみると珍しくそこそここの役に近いようだ…
リボンが普通だし…でもどう出るかな？

「私からだよね…」

そう言って一枚を交換した。

「レンは？どうするの？」

リンのリボンが若干跳ねた様に見えた。

(この役に勝てるのはキングとクイーン以外のフォア・カード以上の
役だけだし…賭けてみるかな？リンも良い役が出来た様だけど)

「俺はいいよ。リンは？」

「私も今いいから勝負する。」

「わかつた。」

互いの手札は同じフルハウスでも

リンのカードはジャックのスリーカードに10のワン・ペア

「俺の勝ちだね？」

「そうみたいだね。あ～あ、最後はもうつたと思ったのにあ

リンは残念そうにしかし笑いながら言った。

ポーカー（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

さて… 小説ではよく『大富豪』などが一般的みたいですね
わかつて何故ポーカーにしたかと言うと… 単なる趣味というか
個人的に大富豪よりポーカーの方が好きだからなんですよ… すい
ません

ポーカーはご理解いただけましたか？

同じフルハウスでも数字がレンの方が強いのでこの話ではレンの勝
ちになります

初めはレンがわざと負けさせてリンが勝つ、という流れもあつたん
ですけど

個人的にはこつちが好きかなあ、という理由でこうなりました。

次話を読んでいただければわかるかと思います。

後レンをバイオハザード嫌いにしたゲームですが題名はわかりませ
んが

似たような物が存在します。（ゾンビを倒すと傷口から寄生虫が出
てくるって言う所）友達がした事があるので使わせていただきました。
した。

私はホラー やゾンビ等は嫌いですけどね？

映画（前書き）

次話です。

：相変わらず私は題名付けたり考えるの下手ですね
えつと今回と次話はリン視点です

ここはある歌の歌詞を若干変えてセリフとかに使わせていただいて
います。

鏡音が好きな方なら一度は聴いた事があるかと思います。

そんなことも考えながら楽しんで読んでいただければ光栄です（^_^）

ではよろしくお願いします！

映画

「…遅い…遅すぎる。約束の時間もつ過ぎたのに
レンが昨日ここに集合とか言つてたくせ」

（まあ…私は何時も待ち合わせる時間より早く着きすぎてしまつた
ど…）

私がこうなつてこる理由は昨夜のレンとの勝負の後の出来事……

「俺の勝ちみたいだね？」

そうレンに言われて、レンの役を見ると残念だつたけど笑いしか出
なかつた。

「そうみたいだね。あ～あ、最後はもつたと思つたのになあ
まあ…レンと勝負する時だけは自分でも運があるかないかわからな
いからね

「で？レンは明日の映画…何が観たいの？」

「ん~…その事だけじ明日までに決めていい？

「えつ？別にいいけど…」

「じゃあ明日1時に公園の噴水の前に集合な？」

「何で？家から一緒に行けばいいじゃない？」

レンの考へてる事が読めなかつた…

何時も一緒に出掛けれる時は最初から一緒に目的地に行つていたから…
「ちょっと俺はリンより先に出て券を買いに行つたり色々してくる
から

「そう…わかつた。1時に公園の噴水だよね？」

「じゃあ、もう遅いからお休み…」

「うん…お休み」

今朝、私が起きた時には既にレンの姿は部屋にはなかつた。

「おはよう…あれ？レンは…？」

てつ毛りリビングにいるだのうと思つていたのにレンはいなかつた

コーヒーを飲んでいたメイコ姉とルカちゃんに聴いてみると

「レン? 今日はまだ見てないけど…部屋にいないの? ?」

メイコ姉は若干まだ眠たそうに言つてきた

「メイコさんのが起きてきたのは先ほどでしたからね…

レン君なら6時位にミクちゃんとカイトさんと一緒に出掛けで行きましたよ?

リンちゃんが起きてきたら昨日言つた通り公園の噴水に待つてゐ、
そうレン君が言つておいて欲しいこと

そうルカちゃんが教えてくれた

「ミク姉とカイト兄も? 何でそんなに早く出掛けたの? ?

「カイトさんは仕事でミクちゃんはその付き添いです」

「ミク姉が付き添い? どういう事? ? ?

「車で行きましたから途中や帰りにカイトさんに何かあれば
車の運転を代われるよ」と道案内だそうです」

そう教えてくれてルカちゃんは台所に向かつた

「成程…カイト兄は方向音痴だもんね」

そつ言いながらチラシと時計を確かめる

(今8時だけ)

ちょつと、どころか…家を出たのだいぶ早いじゃない

カイト兄とミク姉はわかる……でもレンは?

そんなに早くから一体、何をしにいったんだろ?)

「何? 今日はレンと久しぶりに出掛けの予定だつたの?」

「うん、映画でも観に行こうって…

ところで何でメイコ姉そんなにニヤニヤしてゐるの?」

正直に言つて不気味で怖い…嫌な予感がある

「別に…ラブラブだなあ」と思つて

「なつ…何言つてるの? !レンは弟だよ! ?」

「でもレンの事は好きなんでしょう？」

「うう……この姉は何時も何時も

「メイコさん…人の事が言えますか？

「リンちゃん、どうぞ？」

ルカちゃんは私にサンドイッチとミルクティーを出してくれた

「あ…ありがとうございます、ルカちゃん」

「いえ、どういたしまして」

本当にルカちゃんはお茶を淹れるのが上手だ…
ルカちゃんの淹てくれるお茶を飲む度に思う

「何？ルカ…何が言いたいの？？」

「言つていいんですか？」

「別にいいわよ…思い当たる事もないし」

そう言つてメイコ姉はコーヒーに口を付けた

「では失礼します。メイコさんもカイトさんの事が好きなのでは？」

「げほっ！ルカ！な、何を？！」

メイコ姉にはかなり予想外だったのだろう

ルカちゃんに言われて飲んでいたコーヒーがどうやら気管に入った

ようだ

「そうではありませんか？何時もカイトさんの事を心配しているのですから」

どうやらルカちゃんの方が有利なようだ…

確かにメイコ姉はカイト兄には過保護だ

そんな一人のやり取りを見ながら軽い朝食を取った

二人のやり取りを見始めて約1時間

「だからー姉として弟や妹を心配するのは当たり前でしょ？！」

「カイトさんが心配な時だけメイコさん余裕が見えませんよ？」

「じゃあ今も余裕がないように見えるの？！」

「今日はしつかり者のミクちゃんが一緒だから

まあ、今日はミクが一緒だから大丈夫か。

そつ思つているから落ち着いていのではありますか?」

「うう……」

「うやらメイ！」姉は囁きらしに

これはルカちゃんの完全勝利で終わりそうだ…

「ううそつきま

私もレンもお昼はいらないから

じゃあ1~2時半位に出掛けてくるね？」

「わかりました。楽しんで来て下さいね?」

「あつー！レン！ちょっと待ちなさい！？」

「メイ！」せん？何か私が今まで言つた事に間違いや矛盾、反論がありますか？」

「うう…もう私の負けでいいから勘弁して、ルカ！……！」

メイ！」姉は顔を少し赤くしながら降参した

やっぱり、ルカちゃんの勝ちだ

リビングのドアを閉めると思わず廊下で笑いが零れる

レンの考えに疑問は持つたけど

私は準備をして予定より早く家を出た。

そして現在に至る…

(レンが来るのが時間通りじゃないのは分かつてゐるのに…

レンのバカ…ハア)

「…………ンーリ ン……！」

「あ……やつと来た」

遠くからレンが息を切らしながら走ってきた

「ハアハア……待たせてすまん！」

レンは私の近くに来るなり息を切らしたまま手を合わせて謝つている

「絶対に許しません、このバカレン…」

レンに背を向けながら言つ

(こんな素気ない態度をしたって
我慢できずに、にやけちゃうなあ。

本当……レンには敵わない

ちょっと悔しい…)

「うつ……だから「めんつて!!!!」

チラッ、とレンを見ると今朝の事で何だか恥ずかしくて

「もう……いいから映画を観に行こ!」
「よし!」

そう私は言つて先に進む

「ちょっと! リン!!」

少し遅れてレンが追いかけてくる。

レンが追いついて来てから私は

今回、気になつていた事を聞いてみた

「ねえ……何時も一緒に行くのに何で今日は先に行つて券を買いに行つたの?」

「ん? それは… 日曜日だから早く行かないと混むし

それに最近は新作映画が多くつたからなおさら混むからだけど?」

「ふうん…」

レンの返事に少し納得いかなかつたけど気にしない事にした。

「そういうえばまだ聞いてなかつたけど… 今日は結局何の映画を観に行くの?」

「ん~… それは着いてからのお楽しみつて事で」

「何それ????」

「着けばわかるから」

そう言われて首を傾げた

「とりあえず早く行こ!」

レンは微かに笑いを零しながら言つた。

映画館に到着してまだ時間があつたから

近くにあるカフェで昼食を食べて

映画館で私とレンは同じオレンジジュースを購入した。

「レン、もう着いたんだからいい加減

何を観るのが教えてくれてもいいんじゃない?」

「まあ確かに着いたしね……いいよ

今日これから観るのはリンが昨日観たがってたバイオハザードだよ

「……え?でもレンは昨日

バイオハザードが……」

「うん、確かに俺は苦手だよ?」

レンは私が言いたい事を全部言つ前に答えた。

「じゃあ、何で?

私は嬉しいけど……」

「ん?まあリンがいるし大丈夫かなあ、と思つたしついでにバイオハザードを克服しようかと思つたからかな?」「はあ?」

何それ?????

レン……本当に大丈夫なの?????

「俺は大丈夫だから」

「私……声に出してた?」「

「別に出してないよ?」

ただ、リンがそう思つてるのかな?と思つただけ

レン、君はエスパーか……

「とりあえずもうすぐ足下が暗くなるから行こひつ?」「うん……分かった」

それから約1時間半後

「面白かった!」

面白かったよね?……レン?????

映画を観終え廊下に出てレンに話しかけても返事がないし隣を見てもレンの姿がなかつたから

私は後ろを振り返つて見ると……

「…………」

レンは壁に手を当てて座った状態で死んでいた

何処かでチーンと効果音が何かが聞こえた気がする

「ちょっと……レン！？」

「えっ？ 何？ 観てる時は大丈夫そだつたじゃない！？」

「ああ……ラストの手前辺りまでは……」

「そういえば……最後の方で

（へえ……こんなラストなんだあ
……あれ？ 何か服が引っかかるてる？）

つて思つた気がする…

でも部屋が明るくなつた時にはなくなつてたからわからなかつたけど
もしかして……レンが？

「とりあえず、レン！」

何処かで休む？」

「ん……ちょっとこのままいでしさで
もう少ししたら立ち直ると思うから……」

「わかつた」

（そんなにラスト怖かつたかなあ……？

確かラスボスが斬られた後

大量の寄生虫みたいな物が、うじやうじやしてはいたけど…
そんな事を色々考えているとレンが少し顔が蒼い気がするけど

「レン、もう大丈夫だから…
少し付き合つてくれる？」

と言つてきた。

「いいけど…何処に行くの？」

「それはまだ秘密…

とりあえず駅に行こう。」

「え？ 電車で行くの？」

私の反応を見てレンは

「 そ、 う、 じ、 ゃ、 あ、 行、 こ、 う、 か、 ？
そ、 う、 笑、 い、 な、 が、 ら、 答、 え、 た、 。」

映画（後書き）

はい、初めの設定ではメイコさんとルカさんは登場しない予定でしたが

今朝の出来事で登場していただきました！

個人的にメイコさんのイメージはカイメイしかないんですよ…

だから余り好んで出したりしません。

ルカさんはよく料理や家事が苦手とかで書いてる人が多いので料理や家事が得意な設定で書かせていただきました。

あと前書きで言つた通り鏡音の曲の歌詞を使つていますがわかりましたか？わかつた方はその曲のイメージを潰していらっしゃいません！！

まだ続きます。よろしければ次話もご覧下さい。

花火（前書き）

次話です

初めはリン視点で途中からレン視点に変わります
念のため線を引いています。

これにも鏡音の歌詞を一部だけ使っています。
それでは、よろしくお願ひします！

花火

「ねえ…今度は何処に行くつもり?」

電車に揺られながら隣に座るレンに聞いてみる

「ん?いや…ただ花火でも見に行こうかと思つてね」

「え?今日…何処かで花火大会があつた???」

学校でもそんな話はなかつたはずだけど…

「また着けばわかるから…

それに他にも楽しみがあるし」

そうレンは微笑みながら言つていた

「にしても…眠い」

少し欠伸をしながら言つ

そういうえば…何時もより遅めに起きたけどその時は既にレンはいなかつた

一体、何時起きたのだろう?

「レン、今朝は何時に起きたの?」

「ふえ?えつと…5時頃だつたかな?」

そりや、昨夜は寝るのが遅かつたのにそんなに早く起きたら眠いよね…

「ごめん、リン…後30分で着くから

25分後に起こしてくれる?」

「えつ?あ…うん、わかつた」

そう答えたらレンは眠つてしまつた…

何処に行くつもりなんだろ?

でも…レンも着けばわかるつて言つてたから考へるだけ無駄かな?

そう思いながらレンの顔を覗いてみると

レンは微かに寝息を立てていた

(そういうれば…レンがこいつの場所で寝てるのって珍しいなあ

学校でも見た事がないし…)

色々考えたりレンを覗いてみたりしていると
気付けば25分を2、3分過ぎていた…

あ…レンを起こすの忘れてた！

「レン…レンつてば！

もうすぐ着くよ！？」

レンの方を揺すりながら声をかけてみる

「…………ん？

もう着いた？」

目を擦りながらレンが聞いてくる

「だからもうすぐ着くつてば！」

やれやれ、そう思いながら答える

電車が到着して改札を過ぎて外に出ると

時刻は既に6時を過ぎていた

「リン、もうわかつたよね？」

「そりゃ、見えてるしね」

レンが行こうと行った場所、それは遊園地だった。

「レンが朝早くに出て行った理由がよくわかった

「そつか…結構、大変だつたんだよ？予想以上に映画もじつちも混
んでて

約束の時間には遅れるし…」

(最初から言えればよかつたのに…)

「内緒にしておかないと面白くないだろ？」

「今度は声に出してた？」

「今回も出してないよ？」

レン…君は本当はエスパーじゃないの？

レンが朝早くから購入していたチケットで中に入った

「でも…何で遊園地に？」

「ん？ 言つただろ？ 花火が見たかっただからって…」

「言つてたけど何で急に？」

「今年はリンと花火をまだ見てなかつたから」

「そういえば… 今年は部活や試合とかがあつてレンと花火大会に行けなかつたつけ…」

「とりあえず、パレードや花火にはまだ時間あるから何か食べる？」

「そうだね… 何食べる？」

レンが食べたい物でいいよ？

バイオハザード観せてもらつたから

「じゃあ… あれ」

「何？ ポップコーン？？」

「そうじゃなくてその隣のクレープ」

「……レンの気持ちよくわからないね？」

そう言つて二人でクレープを買つた。

二人でベンチに座つてクレープを食べていると

「レン！ まだ時間あるからゴーカートのレース出てくるけど
レンも一緒に出る？」

ここゴーカートはただ走るだけでなくレースが出来る
リンは昔から賭け事や競い事が好きなようだった

「いや… 俺は応援してるよ」

俺の答えにリンは少し残念そうに

「そう？ ジャあ行つてくるから応援しててよ？」

「ああ、わかつてるよ。頑張れよ、リン」

そう言つとリンは笑顔でゴーカート乗り場まで行つた

俺が参加しなかつた理由…

それは、リンは自転車やゴーカート等の乗り物の運転がえげつない…
昔、一緒に乗つて死ぬかと思つたからだ

まあ…俺もリンと同じような運転は出来ると言えば出来るけど滅多にしない

(ランは...あれか)

俺はエーカート乗り場の上にある

やつぱり…簡単にアリフトしてゐる

コンビニの券売機でコマツしてくるのか一度だけ聞いた事がある

「アーティストの心」

え？何それ？？私は普通に操縦してただけたけど?????

(普通、無意識に出来るものじゃないんだよ…)

本当に恐れこいし娘たよ……

そつ思つて下に降つると

満面の笑みをしたリンが

「へへ、見てきた

「うさ、見てたよ。おめでとう」

「当たり前じゃん！」

モハ書したがる」へ正解でした。

「スケルトン」

でも時間は大丈夫なの？？」

「ハシヨ里語に思ふせる

「そつか、じゃあ大丈夫だね。

「でも何時それ取りに行つたの？」

「俺が今朝、チケット買いに行つた時
じゃあ、行こう?」

「うん、何に乗るの?」

「ん?あれ

そう言つて俺は一つのアトラクションに指をさす
その瞬間、リンの顔がだんだん蒼くなつていく

「ちょっ!レン、本気!?」

「うん、本気だけど?」

俺が行こうと言つたのは室内のフリーフォール型のアトラクション

そう…リンが唯一、苦手なアトラクションだ

「私、外で待つてていい?」

「何で?」

「つ!知つてて言つてるでしょ!-?」

「何を?」

「何を、つて!私がこれ苦手だつて知つてるでしょ!-?」

「うん、知つてるよ?」

「じゃあ、どうし…」

「俺も苦手なやつ行つたから」

「!?

まあ…俺がただ怖がるリンを見てみたいだけだけどね

「……!わかった、行けばいいんでしょ!-!」

「じゃあ、並ぼうか?」

ファストパスでも少しばらは待つ

その間、リンは俺の袖を掴んだまま何も言わない

「リン、もうすぐだけど大丈夫?」

「……うん

「降りたら次は何処に行く?」

「……うん

話し聞いてないし…

やつぱりこれはやり過ぎたかな?

そう思いつつも順番がきた

リンは座席に座ってシートベルトをした瞬間
俯いて俺の袖を痛くないのかと思つほど強く握りしめている
(やれやれ、まだ動いてすらないのでさつきの元気はどこにいったんだ…)

「リン、大丈夫だから

目を開けて遠くを見ている方が怖くないよ?」

そう言うとリンは微かに顔を上げたけどまた俯いてしまった。
(仕方ない…上で景色が見えたらもう一度だけ
声をかけてみるか)

「それでは皆さん、いつからしゃいーーー】

そうアトラクションのスタッフの人があつた瞬間
アトラクションは稼働し始める。

「~~~~~！」

リンはさつきより強く俺の袖を握りしめている

(そこまで怖がらなくとも…

でもそろそろ外が見えるか)

「リン、一瞬でもいいから外の景色を見て」

リンは恐る恐る顔を少し上げて外を見た
外を見るともう夕方だから遊園地はライトアップされ
多くの色で綺麗に彩られていた。

リンがその景色に見入っていた時

アトラクションが落ちた

「~~~~~！」

リン…アトラクションの事、忘れてたな

何度も上がったり下がったりしてるとアトラクションが止まり

「皆さん、お帰りなさい。外の景色はいかがでしたか?

シートベルトを外して、御足もとにお気をつけて
お降り下さい。」

スタッフの人が声をかける

「リン、歩ける?」

「うん…大丈夫」

まあ、大丈夫そうかな

「どうだつた、リン?」

「うん、大丈夫…レンの言つた通り
外を見た方が怖くないんだね」

「克服できた?」

「たぶん少しほはね?」

リンはさつきより表情が少し明るくなつてていた
「さてと…そろそろパレードが始まるけど行く?」

「ううん、いい

もう一度だけ景色が見たいから
観覧車に行つてもいい?」

「いいよ」

リンが観覧車に行くと言つのは珍しいな
普段ならジユットコースターとかなのに…

そう思いながら乗り場に歩いて行つた

近くではパレードの音や観客の声が聞こえてくる
観覧車はパレードのおかげで空いていたから
すぐに乗る事が出来た

「リンが観覧車なんて珍しいね?」

観覧車が四分の一を過ぎた辺りで聞いてみる

「えつ? まあ そうかもね

でも、もう一度だけ高い所から景色を見たかったから

「この遊園地で一番、高いアトラクションはこれくらいでしょ？」「確かにねつ！？」

そんな話をしていると一番高い所に到達した直後
観覧車が止まって大きく揺れた

「皆様にお知らせいたします。観覧車は安全装置が作動した為
現在、運営を見合わせています。大変、申し訳ございませんが
そのままの状態でお待ちください。」

「何があつたんだろうね？」

アナウンスの後、リンが聞いてきた

「わからないけどすぐに動くんじゃない？」

スタッフの人の指示に従つて下さいとか言ってなかつたし

「そつ…かも」でも、止まって良かつたかも

そう、リンは笑つて言った

「何で？」

「だつて丁度、一番上だから景色が綺麗じゃない？」

リンは外を指さしながら答えた

外を観ると遊園地だけでなく色々な明かりで彩られた町を見る事が
出来た

「そうだね…」

しばらくすると観覧車が動き始めた

「動き始めたね」

「うん、もう少しだけ止まつてもよかつたのに」

リンがそう言つた瞬間

夜空に大輪の花が咲いた

「あ…花火が始まつたみたいだね、レン」

「そうだね」

「そうだ！レン、来年もまたここで花火を一緒に見ない？」

「いいよ、でも来年は花火大会も一緒に見に行こうな？」

「私とレンの予定があればね？」

リンはそう言いながら笑っていた

花火（後書き）

…リンレンの部活って何でしょうか？

何となくリンが「道でレンが剣道だといいなあ、みたいに思つてます
ありえないような気がしますが（^ー^；）

そこは読んで下さる方の「想像にお任せします！

観覧車の件ですがおそらくあり得ないと思います。

なので子供が乗る時にこけたからスタッフさんが安全装置を作動させた

この様に解釈していただければいいかなと思います。

あと1・2話で完結だと思いますが悩んでます。

翌日の話を書くか書かないか

書いたとしても短くなるような気がするんですね…

元を読んだ友人は「別にどちらでもいいと思う」と言つていたので
…このリンレンは私の手に負えるのでしょうか？

兎に角、頑張ってみます！

気持ち（前書き）

次話です。

タイトル意味不かもしれませんが最後にわかると思います。
書いた本人が若干、読めません！（どうしましょう？！）

レン視点です。

…これが一番グダグダになつてしまつた気がしてなりません（／＼；
）

それでも良いと「の方はどうぞ」覗く下さい。
よろしくお願ひします！

気持ち

「レン、何か食べて帰ろう?」

遊園地から駅に行く途中、リンが言つてきた

「いいけど…」

「じゃあ、レンの食べたい物で!

スイーツは無しね?」

「それじゃあ…学校の近くにあるオムライスの店で」

「そんなお店…学校の近くにあった?」

「なかつたら言つてないよ?」

そう答えて店に向かつた

その店は俺とリンが通つている学校の近くにあるレストランだ
「私はチーズ…ハヤシソースのオムライス頼むけどレンは?」

「ん?俺は…チーズオニオンスープで」

「スープだけでいいの?」

「いいけど…何?」

リンが不思議そうな顔をして…

「…レンの気持ちってよくわからない」

そう言つてきた

「そう?そんな事ないとと思うけど」

「昨日の勝負の後から考へてる事

よくわからいよ」

そう言われた

「美味しい~!」

リンはオムライスの味に満悦の様だ

俺はそんなリンの様子を見ながらスープに口を付けた

「レンはよくここに来たりするの？」

「ん？まあ…よくではないけど

部活や学校の帰りに来るよ」

「へえ…で？注文は何時もそのスープなの？」

「まあ、そうかな？」

オムライスとか食べたら夜ご飯が食べなくなるし」

「そつか、メイコ姉に怒られるからね」

話しながらもリンはオムライスを食べている

「そういえばルカ姉かメイコ姉に連絡した？」

「ふえ？駅でメール入れといたから大丈夫だよ」

「そう…」

「ごちそうさまでした！」

美味しかった～」

どうやらリンはここにオムライスが気に入つたらしいな…

リボンが跳ねてるから…本当にあのリボンは何なんだ？！

「ん？レンどうかした？？」

「え？いや、何でもないよ

じゃあ、帰ろうか？」

俺は伝票を持って席から立つた

店から駅に向かつている途中

ミク姉から連絡がきた

「もしもし？今どこにいるの？？」

「今？今は学校近くの駅だけど？」

「学校の？」

もう…今、車でそつちに迎えに行くから

そこから動かないでよ？」

「うん、わかった

ありがとう」

電話を切つて

携帯をポケットになおしていると

「ミク姉、何で？」

「迎えに来るからここから動くなつて

「そう…」

リンはそう言つと少し伸びをした

「疲れた？リン」

「え？まあ少しほはね

今日は普段より歩いたし」

「ミク姉を待つてる間そこのベンチに座つとく？」

そう言つてベンチに座つて待つていると

リンは疲れからかすぐ眠つてしまつた

(そういえば遊園地で、はしゃいでたからな

それにして…ミク姉は遅いな

電話から30分は経つてるけど…)

そんな事を考えていると青い色をした

RX8に乗つてミク姉とカイト兄が迎えに来た

どうやら運転はミク姉がしているようだ

「お待たせ！カイトお兄ちゃんが車に酔つてダウントリヤがつて

遅くなっちゃた！」めんね？

あれ？もしかしてリンちゃん寝てる？..」

「うん、まあね」

そう答えながらリンを起こさないよう抱きかかえる

「ミク姉、悪いけど後ろ開けてもらひえる？」

「うん、ちょっと待つてね。

カイトお兄ちゃん？しつかりしてよー。

お兄ちゃん側の後部座席のドア開けてあげて？

「うーん、気持ち悪い…

ミク、わかつたから少し待つて

カイト兄はのろのろした動作で後ろのドアを開けてくれた

俺は抱えていたリンを座らせてから隣に座る

「ありがとう、ミク姉にカイト兄」

「どうしたいしまして、でもあんまり遅くまで遠くに行っちゃ駄目

だよ?」

「うふ、わかつてゐる。ありがとう

でもミク姉も心配し過ぎだよ?俺もリンも高校なんだしどこでカイト兄…大丈夫?」

体調があまり良くない兄に声をかけてみる

「うーん…大丈夫ではないかな?

でもしばらく休めば治るから…」

「そう…

最初からミク姉が運転してたの?」

「ううん、始めはお兄ちゃんが運転してたんだけど近道に入つたらお兄ちゃんが田を回して酔っちゃって仕方なく私が運転してるんだよ」

「そ、そ…」

(カイト兄らしさと言えばカイト兄らしいな
この駅までの近道は…S字みたいにカーブが多いから)

それから俺はミク姉が運転する車の中でレストランであったリンとのやり取りを思い出す

「…レンの気持ちってよくわからない」

「そう?そんな事ないと思うけど?」

「昨日の勝負の後から考へてる事

よくわからじょ

(よくわからない…か

リン、お前はよくそう言つけれど

素直な言葉を言つたつて気持ち悪がるだけだろ?

こんな性格の俺だけどお前にはわかつてゐるだろ…
俺がリンの考へてゐるのがわかるようにな
面と向かつては言わないけど…

リン…俺はお前がいるだけで感謝してゐるよ)

思わず微かに笑いが零れる

「レン君どうかした?」

ミク姉がバックミラー越しに聞いてきた

「いや…何でもないよ」

「そう?」

それからミク姉は前を向いて運転している

カイト兄は気分が悪いから寝てる

リンも疲れから寝てる

俺はリンの寝顔を少し見てから

車の窓から星を眺めていた

気持ち（後書き）

ありがとうございました。

グダグダで申し訳ありません！

何故、レンにあんな事言わせたのでしょうか？？？
書いた本人のくせにわかりません（^ー^；）

おそらく次話で終わらせると思います。

まとめる事ができればですが…

ここから先はまだ書いていないんです。

テストがあるので近日中には言えませんが頑張ります！

余談ですが…

カイトの愛車にしている青のRX-8存在はします。

兄曰く「RX-8の青色が多い」だそうです…

兄が黒の8なので知っているのですが後部座席に乗るには

まず前のドアを開けてから後ろを開けて

後ろを閉めて前を閉める…みたいになります。

良い車ですが…正直、面倒です…

朝（ソンベル）（前書き）

初めは昨日帰つて来てからのレン視点

翌朝 からはリン視点になります

翌朝のリンちゃんとルカさんのやり取りです。

：前話からグダグダですがそれでもいい方は
どうぞご覧下さい。

今回は歌詞を使用していません！

朝（リン ver）

家に着くとメイコ姉とルカ姉が家から出てきた

「カイト！？大丈夫？！」

「ありがとうございます、めーちゃん

でも大丈夫だから心配しないで？」

カイト兄がそう言ひながら降りると

足がフラ付いて慌ててメイコ姉がカイト兄を支えていた

「もう無理しないの！」

メイコ姉はそんな事を言ひながらカイト兄を部屋に運んで行つた

「レン君、リンちゃん寝てるから先に降りる？

後だと出にくいと思うから」

「うん、ありがとうございます」

俺はそう答えてリンを起こさないよう抱きかかえながら車から降りるとルカ姉がドアを閉めてくれた

「今朝からありがとうございます、ルカ姉」

「いえ、別に構いませんよ？」

それより：部屋まで大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫

明日は学校側の用事で俺もリンも休みだから

「わかりました。ミクちゃんもお休みですか？」

ルカ姉は車から降りてきたミク姉に声をかけた

「ううん、私はその用事のお手伝いだから何時も通り学校があるよ

「そうでしたか。わかりました」

「じゃあ俺はリンを寝かせてくるから

「気を付けてね？」

「わかってる」

そう言つてリンの部屋へ向かつた

リンの部屋を開けて

リンをベットに寝かせた

(よつほど疲れてたんだな

まあ、明日も休みだからよかつたかな)

リンの前髪を整えてから
もう眠っているリンに

「お休み、リン」

そつ言つてから静かにリンの部屋を出た

翌朝

「うん?

私の部屋? ? ? そつか

昨日ミク姉を待つてる間に寝ちゃったんだ」

壁に掛けられた時計を見るとまだ朝の5時半だった

(5時半か…今日は学校休みだったよね

…お風呂にいっこようかな

そう思い部屋を出ると

微かにカチャカチャと音がする

(何?誰か起きてるのかな? ? ?)

音のする方へ向かうと

ルカちゃんが台所で朝食とお弁当を作っていた

「あ、リンちゃんおはよっ! ジギー! 」

今日はお休みなのに早いですね?」

私に気がついたルカちゃんが言つてきた

「おはよっ、ルカちゃん

私が覚めちゃつて…でもルカちゃんの方が早くない? ?

「そうですか?私は何時も5時前に起きているので

そつは思わないのですが…

さてと、これでいいですね。」

そつ言いながらルカちゃんは4つのお弁当を包んでいた

（5時前つて早くない？！冬場だつたらまだ真つ暗だよ？！
あれ？お弁当が4つ？？）

「今日はルカちゃんも仕事？」

包まれたお弁当を見ながらルカちゃんに聞いてみる

「ええ、今日は夜には帰つてきますけど」

「そつなんだ、今日は出張？」

「そうですよ？」

「何処に？」

「今日は沖縄です。午前中に向うに到着して

5時頃に出発しますから何もなれば夜には帰つてきますよ
それがどうかしましたか？」

「つうん、何でもない

あーお風呂つて大丈夫？」

「昨日はそのまま寝てましたからね

大丈夫ですよ。」

「そつか、ありがとう」

そつ言つて台所を後にした

（ルカちゃんも大変だなあ…

朝早くから皆のお弁当や朝ご飯を作つてくれて
色々な所に行つて帰つて来て…）

湯船に浸かりながらルカちゃんとのやり取りを考えてみる
（こ）の家で一番忙しくしてゐるルカちゃんじゃないかなあ
カイト兄は仕事はあるけど8時に出で夕方には帰つてくるし

メイコ姉はカイト兄と一緒に出て夕方には…いや、遅い時もあるね
一次会とか二次会とかで稀に三次会とか行くみたいだし…

ミク姉は生徒会や部活はあるけど私とよく帰るし

レンは委員会や部活でも大体同じ時間に帰ってくる…

ふう…ん?お風呂に入つて考え事してたら眠くなつてきたな

何時もと全然違う時間に起きたからかな?…)

軽く目を擦る

(もう一回だけ軽く寝ようかな…)

そう思いお風呂場から出て着替え

ル力ちゃんがいた台所に向かう

「ル力ちゃん、私は部屋にいるから…」

目を擦りながら言つと

「わかりました。疲れが残つてゐるでしちゃうから

今日はよく休んで下さいね

そう笑顔で言つてくれた

「うん、ありがとう

ル力ちゃんが出る時に言えないかも知れないから

ル力ちゃん気を付けて行つてきてね?」

「ありがとうございます。

お休みなさい、リンちゃん

そう言られて部屋に戻つてベットに横になると
すぐに眠つてしまつた。

朝（コンベル）（後書き）

……はい、わかつてます。終わらなかつたですね…やつぱり本当はルカとレンのやり取りを書くはずでしたがわからなくなつたので

こつちにしました。はただルカレンが意外と好きだからだけです。何時か書ければと思います。

さて設定でも書かなかつたのですが皆の仕事は何でしょう???

カイトとメイコは何でしょうか??謎ですね…

もうこれ自然消滅するのでは…?

何とかまとめないといけませんね…頑張ります。

ですのでもう少しだけお付き合いしてあげて下さい。

よろしくお願いします。本当に申し訳ございません…!!

朝（レンver）（前書き）

次話です

前話の事ですが、タイトルを変えて少しだけ内容を変えました
変えたと言つてももう一度読む必要があるほど変えてません
なので別に気にしないでください

今回はタイトルの通りレン視点です。

前話でリンが寝てから1時間ほど後の話です
馴文でも構わないという方はどうぞご覧下さい。

朝（レンver）

「カイトー！行くよーー！」

「い、今行くから！ちょっと待つてよ、めーちゃんーー！」

「それじゃあ、行つてきまーす」

玄関の方からカイト兄とメイコ姉それにミク姉の声がする…

「はい、お気を付けて行つてらっしゃい」

少し遅れてルカ姉の声が聞こえてきた

「ん……あの三人が出たつて事は7時頃か」

昨日、寝たのは…リンを部屋に運んだのが11時

その後、お酒で酔ったメイコ姉をルカ姉と介抱してたから…

寝たのは12時頃だつたかな…

そう考えてベットから体を起こして伸びをした

二度寝も考えたが今日はルカ姉が

仕事に行くのを思い出し着替えてからリビングへ向かう

リビングの扉から部屋を見ると

ルカ姉は椅子に座りながら手帳を確認している

「おはよう、ルカ姉」

俺はリビングに入つてルカ姉に言つた

「あ、おはようございます。レン君」

ルカ姉は手帳から目を離してそう言つた

「ルカ姉、今日は出張だつたよね？」

「ええ、これから沖縄へ行つて…

何事もなれば夜には帰つてきます」

「やうなんだ…

ところで、リンはまだ寝てるの？」

ルカ姉の向かい側の椅子に座つたまま

廊下に面している扉を見る

「リンちゃんは5時半頃に一度、起きて

またお休みになつてからまだ来てはいません」

「え？ 起きてまた寝たの？？」

「ええ、昨日の疲れが残つていた様で

もう一度、部屋で休むと言つていました」

そう言うとルカ姉は椅子から腰を上げた

「そつか…」

「レン君、朝食どうされますか？」

「え？ ああ、ルカ姉ありがとう

でもリンが起きてきたから一緒に食べるよ」

「そうですか、ではここに置いておきますから
後でリンちゃんと食べて下さいね？」

「うん、ありがとう

ルカ姉は今から出るの？」

「ええ、では行つてきますね？」

「うん、気を付けてね？ 行つてらっしゃい」

ルカ姉は仕事に行つてしまつた

(… わてと、どうしようかな

リンはおそらくまだ起きてこないだろうし…
掃除とかはルカ姉が昨日してたし…

ゲームでもして時間を潰そつか
リンは遅くとも9時頃には起きてくるだらう…)

そう思い部屋からDSを取つてきた
最近、俺がしてるゲームはブラックだ

(よし…今日はマイツの色違いを出してやる
俺は椅子に座つてゲームの電源を入れた

朝（レンver）（後書き）

えつと…すいません！謝りたいので謝りますーー！
ブラック&ホワイト楽しいですね？

学校でも友達と量産して欲しい能力値を出したり
色違いを粘つたり…色々します。

はい、ある種の廃人です。あえて否定はしません…
なのでポケモンはそれなりに答える事が出来ます！

ちなみに新作は総合プレイ時間24時間くらいで殿堂入りしました。
レンは一体何の色違いを狙つてているのでしょうか？
さてと…は置いておいて

他の物を考えているからか見事にまとまりません！
どうしましょうか…？

後ですね…カイトやメイコ、ルカの職業考えてみました！
まずカイトが理数か体育の教師でメイコが国語か社会の教師
ルカは…英語か音楽、もしくは美術の教師…という考えになりましたが

読んでくださっている方はどんな考えなのでしょうか？
差し支えがなければ教えていただきたいです。
では、またよろしくお願ひいたします。

朝の飯（前書き）

次話です！

今回はリンク視点です。

駄文でもいいところはどうぞ」「覧下さい
よろしくお願ひします。

あと忘れていましたが一つ注意していただきたい事があります。

「」の様に「」が一重になつていて、部分が一ヶ所あります。
そこは一人が同時に言った、と考えて下さい。よろしくお願ひしま
す。

朝ご飯

「ん…9時前か
ん～…ちょっと寝すぎたかな？」

目を覚まして一つ伸びをする

（昨日は…帰りから寝ちゃって一度5時半に起きたから
大体…9時間位は寝てたのかな？そんなにいつまで寝てないか…
でも…3時間前より疲れは取れたみたい）

私が着替えてからリビングに向かうと

レンは何かに集中していた

（またゲームでもしてるのかな…よし…）

私はレンを驚かそうと足音を消して近付いた

レンに手を伸ばした瞬間

「おはよっ、リン」

「…?……何でわかつたの？」

「別に？何となくだよ…

今、朝ご飯持つてくるから座つてて

レンはそう言つとロボの電源を切つて台所に向かつた
「ねえ、レン

ルカちゃんも行つたの？」

「え？うん、今から1時間半位前に行つたよ

レンは朝ご飯持つて答えてくれた

「はい、リン

紅茶でよかつたよな？」

「え？うん、ありがとう

あれ？レンもまだだつたの？」

私は向かいに座つたレンに聞いた

「ん？ああ、リンが起きてくるまで待つてた

「別に待つてなくてもよかつたのに…」

「この前、リンが言つてただろ？」

一人で食べるのあまり好きじやないつて
確かに言つた事はあるしそれは本当だけど…
「でも私が起きてくるまで何してたの？」

「ん? ブラック」

「何かいいの出た?」

私はレンが淹れてくれた紅茶を飲みながら聞いてみる
「ん? …特にはないかなあ?」

あ、でも…強いて言つならヒトモシの色違いかな?」

「色違いか?」

(う~ん…ルカちゃんとレンだつたら

どつち方がお茶を淹れるの上手かなあ?)

そんな事を考えながらまた紅茶に口を付けた

「リン、どうかした?」

「え? ううん、何でもないよ」

私はそう答えて朝ご飯のサンドイッチに手を付けた

「「「」」ちそうさまでした」「

私とレンは同時に言つた

「ふつ、ははは!」

「いきなり笑うなよ、リン!」

「ごめん、ごめん! あはははは…」

ヤバい、笑いが止まらない!

「リン、大丈夫か?」

「だ、大丈夫だから!」

少し涙が出た

「はあ…私が後片付けするから」

「ありがとう、リン」

朝いじ飯（後書き）

えっと…何でしう?

朝食がサンドイッチ多いですね。

レンはヒトモシではなく別の色違いを狙っていたのでしょうか?

ちなみにヒトモシの色違いは初めは水色でランプラ では赤紫…で

したか

そしてシャンデラがオレンジ色です。

私はハロウィンっぽいので意外と普通よりは好きですね…

さて…何時完結になるのかもう私でもわからないです…

時間がかかるかもしれませんね…頑張ります!

よろしくお願ひします。

相談（前書き）

読んでる方は少ないと思いますがお久しぶりです。
約1ヶ月は空いてしまったみたいですね…

はさて置き…

サブタイトルに書いていますがリンガレンに相談してる感じです
では久しぶりですし間が空いているのでも少し変っているよ
うに感じます

毎度の事ですが駄文でも構わない方はどうぞ」覧下セー

「…ねえ、レン?」

「ん、何?」

朝ご飯の後片付けを終えたリンは

椅子に座つて本を読んでいた俺の横の椅子に座る

「今日は階が帰つてくるの遅くなるって言つたっけ?」

「まあ… そうだけど?」

それがどうかしたの?」

本を読みながら答えた

「え? いや… 特にはないんだけどね?」

何時もルカちゃんが色々してくれるじゃない?」

「まあ、そうだね…」

ルカ姉に負担かけると思つよ…」

そう言いながら読んでいた本から目を離した

「でしょ?だから…

今日何か出来る事ないかなあ?と思つたの…

でも掃除とかはルカちゃんがよくしてくれてるからね?」

土日は体調が少し悪かったのか仕事は休んでたみたいだけど
私、ルカちゃんが仕事を休むの珍しいなと思ったもん」
リンもリボンも少しシュンとしながら横に座っている
どつやら、真剣に考へていのよつだ

「まあ… 確かにね

でも、あれはメイコ姉が休ませたんだろう?」

「え、 そうだったの?」

驚いた顔をしてリンが聞いてきた

「確かにそうだよ? メイコ姉が

ルカは仕事の休みの日も色々と働き過ぎだから少しは休め……って

「そうだったんだ？」

確かにルカちゃんは色々してるもんね？

仕事に家事全般に…後は部活の顧問だつだけ？

今日は休み明けで出張らしいし？」

リンはメイコ姉がルカ姉を休ませた理由に納得できたようだ

「リン、話戻るけどいい?」

「え? あ、うん

「めん、どうぞ?」

「俺に一つ考えがあるんだけど?」

「どんな事?」

「…今日は俺とリンで夜ご飯作る?」

「レン、頭良い!」

「ありがとーーー!」

リンはそう言つて飛びついて来た

「なつーーー! リン! ?」

「レン、どうしたの?」

「ああ、『めん』『めん』

そう言つてリンは離れた

「こや…うそ」

それから俺は顔をリンに見られないうちに椅子から立ち上り
持つていた本をリビングの隅にある棚になおして
振り返らずにリンに聞いてみた

「で? リンは作るとしたら何を作る?」

「それが…思いつきにくくてね?」

リボンがまたシュンとしている

一つ息を吐いてからリンの隣に座つて
それとなく思いつかない理由を聞いてみた
「何で思いつきにくいの？」

「だつて…ルカちゃんあんまり好き嫌い言わないし
苦手なものだとしてもそれを隠しながら食べるでしょ？
だから、ルカちゃんがどんなのが好きかわからなくて…」

……成程ね

確かにルカ姉は家族にも本音とか全く言わない
何時も自分の中に閉じ込めて出そうとしない…
それは本人が特に気にしていないから

でも好き嫌いは別の話…

直接、言つたりはしないけれど

ルカ姉の好き嫌いは注意深く見ていると
いや、声を聴いているとよくわかる
ルカ姉の声は普段は綺麗なアルト
でも、苦手な物を食べた時は少し声が上がつて
語尾が上げ調子になる時がある

おそらく、この事に気が付いているのは
本人を除いて俺だけだと思う…
実際、リンは気が付いていないしな
あ、でも隠しながら食べてる事には気付いてたのか

「…………カイト兄と逆なんだよ」
「え？レン、何て言つた？？」

考えていたのか聞こえなかつたらしい

「だから、ルカ姉が好きな物はカイト兄と逆なんだよ

「え… そうなの？」

「そうだよ」

そう言ひつとリンは不思議そうな顔をしている

「レン… 何で言いきれるの？」

「ああ… ルカ姉の癖を知つてゐるから」

「レンはルカちゃんの癖を知つてたんだ？！」

「ルカ姉の手伝いをしてたら

何となくわかつてきただといふか…」

「あ、そつか… レンよく手伝つてゐるもんね？

ああ！だから紅茶の味が似てるんだ！！」

「え… 紅茶？」

「そつそつ… サッキ気になつてたの

ルカちゃんとレンの淹れてくれた紅茶の味が似てたから
リンはまるで謎が解けた様にリボンを揺らしながら笑つている

(リン、お前…)

さつき… そんな事を考えてたのかよ)

「レン、どうかした？」

リンはスッキリしたといつよくな顔をしている

「…いや、何でもない

で、どうするの？ルカ姉の好みはわかつたし
何を作るか少しほは考へやすくなつただろ？」

「うん、まあね？」

カイト兄と逆つて事は辛い物つて事でいいの？

「まあ、そう言ひ事になるかな？」

辛い物は好きみたいだけど

ルカ姉は辛い物を作る時はカイト兄に合わせてるから

だいぶ前にルカ姉と食べに行つた時はかなり辛いやつを頼んでたしね

「へへ… なんだ？ 少し意外だつたなあ

ん？ ジャあ甘い物は嫌いなの？」

「そうじゃないけど… まあ、好んでは食べないかな？」

アイスとかでもサッパリした感じのシャーベットを選んでるから

「そつか… よし、今日はカイト兄には悪いけど

辛い物を作つてみよう！－！」

リンがそつ言つうとコボンがペラ ペラ ペラと跳ねている…

(コンのじの表情は…
正直、嫌な予感しかしない…)

「……念の為に聞いておくけど
どれくらい辛くするの？」

「え？ えっと… 意識が逝っちゃつ位？」

リンは今にもテヘツとか効果音が聞こえてきそうに言つた

リボンもよく跳ねている…

「…カイト兄がいるから

意識が逝くほど辛いのは却下

それで何を作るの？」

「ええ！ でもカイト兄がいるから仕方ないか…
でも辛い物は決定だから…

四川料理かカレーかなあ？

レン、出来そつ…」

「まあ、調味料とかは全部揃つてゐばすだからどちらも作れるけど
？」

「そつか… ジャあ、えーと… 時間もあるしスープカレーにしようつか

！」

「スープカレー？ まあ、いいけど

…リン、とりあえず足りない物を買いに行こうかついでにお昼でも食べに行く？」

時間を見ればもう一時半だった

「お昼は適当に買つてくれればいいんじゃない？」

時間がもつたまないし…

あとミクちゃんとかに連絡しといたほうがいいかな」

「そうだね…リンが連絡しといてくれる？」

「OK！じゃあ、買い物に行こ？」

「はいはい…でも、準備してからな？」

そう言って俺もリンも出掛けの準備を始めたと言つても家の窓とかは開けてはいなかつたから財布や家の鍵を取りに行つたり足りなさそうな物を確認するだけだけ

(…カイト兄は大丈夫かなあ？ルカ姉は余裕で大丈夫だろう
ミク姉やメイコ姉はギリギリ大丈夫だとは思うけど…

リンがどれだけ無茶をするか…

カイト兄には業務用スーパーとかでアイスでも買つておくべきだな

…)

「レン、早くー！」

自室でそんな事を考えながら財布と鍵を鞄に入れていると玄関からリンの呼ぶ声が聞こえてきた

「わかった、すぐ行くから！」

考えるのは後にしようと思つて

部屋から玄関へ向かいリンと二人で買い物に出掛けた…

相談（後書き）

グダグダですいません(-_-;)
ボカラーファンの方でイメージが崩れたという方にはお詫び申し上げ
ます！

えっと… 読んでいて気が付いた方もいらっしゃるかもしませんが
(そんなに読んでもらえてないと思つてますけど…)

私がリンとレンが作る料理を何故スープカレーにしたのでしょうか?
お気づきの方はそのままでおそらく合つてますから(^__^ ;)

でも、まあ…あの曲しかないですからね?

では、また何時更新出来るかわかりませんし
完結に持つていく事が出来るかわかりませんが
お付き合いしていただける方はよろしくお願いします。

帰り道（前書き）

買い物をした後の帰り道での出来事です。

どんな買い物だったのかは… 読んで下さった方の「想像にお任せします。」

それでは、駄文でも構わないという方はどうぞご覧下さい。

よろしくお願いします。

帰り道

「意外と時間がかかったね、レン？」
リンは俺の前を歩きながら言つてくる

答えたいけど今の俺はそれどころじゃない！

「…………」

「あれ、どうしたの～？」

返事をしないのが気になつたのかリンは振り返つた

「リ、ン…………頼む、から……少しば、荷物持て！！！」

そう言つて、止まつて両腕に持つっていた色んな荷物を置いた
歩いていただけなのに息が上がつている

そつ…買い物は必要な物だけ買つて帰るつもりだつた
でも、リンが食材以外にも買つたりするから荷物が増えた
で！その荷物を何故か俺が全部持つていい…否、持たされた
それから、今まで何故こうなつたのか考えながら歩いて
もし、またリンと買い物に行く事になつた時はどうするか悩んでいた
何故かと言つと、リンは色んな意味で目立つ…
中学の時は部活とかで心配はそんなにしていなかつたが
高校に上がつてからは気になつて仕方がなかつた…
普段からどこか抜けていて明るくて無邪気にはしゃいだり
感情をすぐに表し出してしまう性格…

弟の俺でさえ可愛いと思つ。

実際、中学の頃から学校で男子からよくリンの事を聞かれる
正直、うんざりしている…

もし、姉弟として生まれないでリンと出会つていいたら
俺は間違いなくリンに惚れてしまうだろう

だから、ちょっとドバーパートとかに行くとリンに向けられる視線が気

になつて仕方がない

その度に俺はリンに話しかけたり手を引いて「こうちだらっ?」とか
言いながら

その場から離れたり、向づがいなくなるようにしたりして「この
そんな俺の苦労も知らないで…この姉ときたら
ずっと、楽しそうに買い物をし続けていた…

「あ、やつぱり重かつた??」

リンは何故か二コ二コしながらそう言つてくる
「当たり前だる…やつ キより手に力が入らない」
そう言つて、両手を開いたり閉じたりした
(人間つて…いきなり強い力とか使うとしばらく握力が下がるんだ
よな

これは袋のせいで血が止まつてたからだと思つけど…)

「ごめん、ごめん。半分は持つから…

レンがどれ位持つていられるのかなあ…と思つてさ?」
そう言つとリンは持つて来ていたリュックサックの中に
潰れにくい順に袋に入っていた物を入れていく
「よいしょつと…これで良し!

レン、行こう?」

そう言つてリンはリュックサックを背負つて残りの袋を持った
「ん、わかつた」

俺はそう答えて一人で歩きだした

「そういえば、レンと買い物したの久しぶりだつたよね?」

「そう…かな?」

「そうだよ…中学に上がつてからはレンはルカちゃんの手伝いで
ルカちゃんと買い物に行つてたでしょ?」

「…そういえば、そつか

何？怒つてんの？？

そう言つてリンを見てみる

「べ、別に怒つてはないけど…」

「けど？」

「中学からほお互い部活とか色々で…試合とかは観に行つたりした

けど遊びに行つたりする機会が少なくなつたから…」

「やっぱり、怒つてるんだろう？」

「怒つてない！」

「怒つてるよー！」

「怒つてないつてばーーー！」

そんな事をしじまへ言つていた

「せう言えば…何であんなに楽しそうだつたの？」
空を見ながら俺の前を歩いていたリンに話しかけた

「え？」

「買い物…何がそんなに楽しかつたの？」

「ああ、気になるの？」

リンは不思議そうな顔をして振り返つた

「そりゃ、そうだろ？」

「そうだな…私が楽しかつたのは

通り過ぎる女の子達、嘘…レンの事を見てたからかな？」

「…………え？」

「気付いてなかつたの？」

「…………言われてみれば

デパートでは女の子の話声や、視線を感じていたような気が…
でも、視線のほうはリンに向かはれているものだとばかり…
「レンって意外と鈍感ね
昔からそうだつたけど？」

リンは笑みを零しながら言つてきた

「…リンにだけは言われたくない
で、何でそれが楽しいわけ？」

「だつて…」

私のレンはこんなに格好いいのよ、て
見せびらかしてゐみたいで気分が良いんだもん

「わた…！？」

リンは笑いながらそう言つた

（落ち着け。相手はリンだぞ？

リンに何か期待するだけ無駄だ…）

「今のでわかつた？

私が何で楽しんでたか

「…よく、わかりました」

「そつ？」

リンは笑いながらまた前を向いて歩いている
俺はリンの横に並んで歩き始めた

「レン、どうしたの？」

「ん？いや…何でもないよ」

それから家までずっと並んで歩いて帰った

帰り道（後書き）

…すいません

少し、危ない方へ行つた気がするのは気のせいでしょうか?
遅くて申し訳ありません。

後しばらくしたら完結に持つていけそうな気がします。
気がするだけですから…当てにしないで下さい

ハバネロ（前書き）

サブタイトルがわかりずらいこと思います。すいません
それにもかぎりぐだぐだです…
それでもいいところの方はどうぞハヤシ覗|トセー

ハバネロ

「じゃあ、材料は俺が切るから
調理はリンがしてね？」

「え、私だけで調理するの？」

「だつて、作るって言い出したのはリンだろ？」

「俺はリンに分量とどうするか言つから」

家に着いてからリンに言つた

それから、俺は普段からルカ姉を手伝っていたから
全部の材料を切り揃えるのに時間は掛からなかつた
でも、リンが台所に立つのはお菓子を作る時だけ
そんなリンを見ていて正直…危なつかしい

俺が切つた野菜の素揚げの時

火が強いから…俺がそれを指摘したら

『そうか、火が強かつたのか』なんて言つてくるし
本当に学校の家庭科の調理実習とか大丈夫なのか心配だ…
主にリンと同じ班の人達が…

そんな事を心配されているとは知らない

リンは今、スープカレーのスープを作つてゐるけど…

本当に普段…あのお菓子をちゃんと作つてゐるのか…と疑問に思う

「レン〜？チリペッパーつてどれ位入れたらいいと思う？」

リンはさつきからずつとスペイスボトルを振つてゐる…

後片付けをしている俺に聞いてくる

（毒々しい位に色が赤いな…

カイト兄…ごめん、俺でもこのスープカレーの辛さを扱える自信がない）

「……………リン、それ入れ過ぎ」

「え！ なんだ？」

でも、カイト兄に会わせる訳じゃないからいつか 「

リンは恐ろしいほど楽しそうにしている…

(リン、カイト兄の為にも

せめて…せめて、ハバネロペッパーには気が付かないでくれ！
あ、でも後はスープを煮込めれば終わりか…)

ここで俺はやつと安堵のため息を吐いた

～煮込み終えてから約30分～

準備は出来たから片付けを終えて一人でリビングでゆっくりしていた

「あ…そういうえば」

急にそう言ってリンは台所に向かった

「？」

不思議には思つたが俺は読んでいた本に視線を戻した

「ねえ、レン

これかなり入れたけど…結局何なの？？？」

リンは台所から一つの赤いスパイスボトルを持つて来た

「え？ どれの事を言つて…」

本から目を離してリンの持つている物を見て血の気が引いた
「リ、リンさん…それだいたいでいいから答えてくれ
スープに…どれ位の量を入れた？」

「え、何でリンさんなの？」

ん…全部レンの言つた量の倍くらい入れたから
でも、これは確か…10回か15回は振つてた気がする
リンはよく思い出そうとしている

(カイト兄…ごめん、終わつた

俺がもつと注意してリンを見ておくべきだった。」()

「レン、どうしたの？」

「これって何なの？」

「……ネロ」

「え、今何て言った?」

「その名前はハバネロペッパーって言つんだ」

「……え?」

ん~…ヤバいな

俺の答えを聞いて流石のリンもどうしようか迷つている

「…リン、さつきスペイス取りに行つた時

近くに白ワインに漬けたレーズンはあつたよな?」

「え?…あ、うん

あつたと思うけど…

それがどうかしたの?」

「リン、俺はちょっと買い物に行つてくるから留守を頼む

それから、スープカレーは絶対温めるな!」

「え?…ちよつ、レン!…!」

それだけ言つて俺は急いで買い物に行つた

ハバネロ（後書き）

ぐだぐだですいません…

えっと、私は試した事がないのでわからないのですが
白ワインに漬けたレーズンをカレーに入れると甘くなるそうです
唐辛子の辛味は温かいと辛いですが冷たいと辛さは抑えられるそう
です

さて、レンは何を買いに行つたのでしょうか？

もしかしたら読んでくださった方の家にもあるかもしませんね？

味見（前書き）

えっと…結構長くなつたような気がします
久しぶりにミクが出てきます
今回はリン視点です
駄文でも構わないと言つ方はどうぞ」覧下せ」

味見

レンが出て行つてからしばらくしてミク姉が帰つて來た
「ただいまー！」

「リンちゃん、レン君は出掛けてるの？」

ミク姉は制鞄を持ったまま聞いてきた

「お帰り、ミク姉

うん…ちょっと買い物に行つてくるつて」

私はレンが出掛けでからずつとソファに座りこんでいた
「そつか…リンちゃん、ちょっと荷物とか部屋に置いてくるから待
つてて？」

そう言つてミク姉は部屋に行つた

（ハア…レンの言つ事ちゃんと聞いていればよかつた…
あと、確かめてから使えばよかつた…）

さつきからため息ばかり吐いていた

近くのクツジョンにボスンと顔を埋めると
丁度、ミク姉が部屋から着替えて戻ってきた

「リンちゃんどうしたの？」

レン君と何があつたの？」

ミク姉は私の隣に座つて心配そうな顔をして聞いてくる
（ミク姉の心配性は相変わらず変わらないね…）

そう思つと少しだけ何故か気分が楽になつた

「ううん、レンとは喧嘩とかもしてないよ…

ただ、カレーが原因で落ち込んでたんだあ

私はクツジョンから顔を上げてミク姉にさつきの出来事を話した

「うへん…」

ミク姉は私の話を聞いてからずつと唸つてている

私はそれを不思議そうに見ていた

「ねえ、リンちゃん？」

「何、ミク姉？」

ミク姉は少し笑いながら言つてきた
(何を考えているんだろう...)

私はキヨトンとしていた

「そのスープカレー...ちょっと食べてみない?」

ミク姉は微笑みながら私の言つてくる

「え...ちょっと、何言つてんの?！」

私は驚いてミク姉を見た

「だつて、味がわからないと調整できないでしょ?
レン君だつて何か考えがあつて買い物に行つたと思うし
私とリンちゃんが食べてみてだいたいの味が分かれれば
レン君も助かると思つしね?」

「確かに...」

「でしょ?リンちゃんが嫌なら私だけ食べてみるしね
ミク姉は笑いながらそう言つてきた

「そ、それだけはない!」

ミク姉一人だけに危険な事させたくない!!!

「それじゃ、食べてみよ?」

そう言つて二人で台所に向かつた

「あ、あのさミク姉?」

レンから絶対に温めるな、つて言われてるから温めなくていいよね

?」

恐る恐る小皿を持ったままミク姉に言つてみた

「レン君に言われてるんじや仕方ないね?」

ミク姉はさつきと違つて真剣な表情をしている

私はそれを見てからカレーが入つている鍋の蓋を取つて
小皿に少量入れてミク姉に渡した

「はい、ミク姉」

「うん、よし！じゃあ思い切つて飲んじゃおうっ！」

ミク姉がそう言つて一人で同時に飲んでみた

「「辛

！！！」

二人とも同時に叫んだ

ルカちゃんが作るカレーより何倍も辛い…

「かはつ！み、ミク姉大丈夫？」

辛さで少し咽ながら言つてみる

「けほつ！な、何とか…想像以上に辛かつたね」

ミク姉は喉を手で押さえている

二人とも少し涙目になりかけだった

「レン、ただいま！！！」

丁度、レンが帰つて来た

「あ、帰つて来た」

「レン君ナイスタイミング！」

レンは台所に来ると唖然としながらこっちを見ていた

「えっと、聞きたくないし見たらわかるけど…

二人とも一体、何したの？」

レンは買つてきた物を台所に置くと聞いてきた

「ちょっとだけカレー食べてみたんだよ」

ミク姉はさつきと同じで喉を押さえたままレンの質問に答えた

「はあ…この馬鹿！」

レンはそう言つと買い物袋からかなり大きいアイスを出して冷凍庫に入れて

それから冷蔵庫から牛乳を取り出して

それを二つのコップに入れて私とミク姉に渡してきた

「はい、これ飲んで」

レンは少し顔を顰めてそう言った

「何で牛乳なの？」

「リン、質問する前に早く飲め！」

レンはぱりぱり少しき怒っているらしい
仕方なく私とミク姉は言われた通り牛乳を飲んだ

「これで少しは楽になつただろ？」

レンは飲み終えた私達に言った

「あ、本当だ…さつきより少し樂になつてゐる」

ミク姉は不思議そうに言った

「確かに…でも、何で？」

私は不思議そうな顔をしてレンに聞いた

「水とかお茶だと飲んでも辛さを洗い流すだけだけど

牛乳は洗い流すだけでなく牛乳に含まれている脂肪分が舌全体を覆うから辛さが多少和らぐんだ

あと、カレーは刺激物だから食べると胃や食道に多少は負担がかかる
牛乳は飲むと胃酸を中和して胃の負担を減らす事が出来るんだよ…
だから本場の人とかはカレーを食べた後にラッシーやチャイとかを
飲んだり

甘い物を食べたりするんだよ…」

「……………」

レンの回答に私もミク姉も啞然としていた

「…………あのさ、もういい？」

「え？ あっ、ごめん

ところでレンは何を買いに行つてたの？

「ん？ リンゴとマーマレードに牛乳とアイスそれからヨーグルト…
ステーキカレーに使つのはとりあえずリンゴだけ

使ったとしても気休め程度にしかならないような気がするけど」

レンはそう言いつと手を洗つてリンゴの皮を剥き始めた

レンが手を動かす度シャリシャリと音がする

「レン君、リンゴだけ使うのなら何でマーマレードや牛乳、アイスにヨーグルトを買ってきたの？」

ミク姉が不思議そうにレンに聞いた

「マーマレードはカレーに一応合ひからリンゴで黙だつた時に少し使うため

牛乳とヨーグルトは家に蜂蜜とレモンがあつたからラッシーを作るため

アイスは…カイト兄対策の一つ

レンはそう言いつとリンゴを剥き終えて

そのリンゴをすりおろしていく

「ねえ、レン

何か手伝える事ない？」

「ん~…じゃあ、リンゴはラッシーの作り方を言ひから量を量つて作つてくれる？」

ミク姉はこれがどれ位の辛さだったか教えて

「「うん!わかった」」

そう私もミク姉も答えた

味見（後書き）

…牛乳の部分ですが他にも説明の仕方があるとは思いました
でもそんなに深く説明しても長くなってしましますから…

どうでもいい事ですが胃十二指腸潰瘍や逆流性食道炎の方の食事制
限指導にカレーなどの刺激物は食べないこと、とありましたね
あとは…カレーに甘味料を使う場合ですがマーマレードの他にマン
ゴチャツネ

風味を付けて甘味ならチョココーティング

風味だけならインスタント「コーヒー」を少量入れるといいそうです。
正統派なら大量の粗く切ったまたは1／8に切った玉ねぎを慎重に
炒めて

仕上がり20分前に追加すると風味と甘味が増します

ここに書いたのはカレーを甘くしたい場合ですから気を付けて下さい
すりおろした人参を使うのもありますけど…風味にだいぶ出るよう
な気がします

以上です…長々と失礼しました

ルーチンルート？（前書き）

えつと次話です
駄文ですがべつにいいという方はビリヤード観戦で
では、よろしくお願ひします

「レン〜！材料これでいいんだよね？」

「これからどうするの？」

「さつさつき言った分量を量つて

全部ミキサーに入れて軽く攪拌して！」

レンはそう言うとカレーに再び視線を戻した
それからレンに言われた通り分量を量つて
ミキサーに全部入れてスイッチを押した
モーターの回る音が聞こえる

「これ位でいいの？」

私はお菓子はよく作るからあんまり攪拌すると
バターみたいになると思つてミキサーを止めてレンに聞いた

「え？ ああ、大丈夫

別にバターみたいになつてもおいしいけどね？」

じゃあ、それは冷ましといて」

レンはまたカレーを見てる

私はラッキーを冷蔵庫に入れた

「レン… 大丈夫そう？」

私は心配そうにレンを見た

「そんなに心配しなくてもいいよ…

さつきのリングチョコと食べたらけつこう甘かつたからね

ただ問題はマーマレードは買つたけどこの家で使う人は少ないから
な…」

そう言つとレンは悩み始めた

確かに… 家でジャムを使う人は甘党のカイト兄くらいだ

あとは私がお菓子とか作る時に少し使うだけ…

でもマーマレードは果皮が残つてゐるから少し苦味があつたりする

カイト兄もそんなに好んで使わないはずだ…

私は私でマーマレードを使ったお菓子はそんなに知らないし…
レンはそれも考慮して小さい物を買つてきたみたいだけど
どうしたらいいんだろう?

「一つだけ私に考えがあるんだけど…」

レンと話をした後、電話がかかってきたミク姉が戻つて来た
「ミク姉…電話してたのに話聞いてたんだ?」

レンは私の後ろにいたミク姉を見た

「レン…今それ聞く事?」

ミク姉、考え方って何?」

私は振り返つてミク姉に聞いてみた

「え?まあ…うん」

私はミク姉の質問に不思議そうに答えた

「じゃあ、ケーキとか作れない?」

「ケーキ?」

簡単に作れるけど…それがどうかした?」

ミク姉は別に確認しなくても私がお菓子を作るのが得意なのは知つ
ているはずだった

たまに一緒に作つて私が教えるのだから…

「ああ、成程そういう事か…」

レンはどうやらわかつたらしい

「じゃ、レン君あとよろしく

私はちょっと出掛けてくるから」

ミク姉はそう言つと車の鍵をクルクル指で回しながら出て行つた

「え…ちょっとミク姉?！」

私は訳が分からずミク姉が出て行つた玄関の方を見ていると
外から車のエンジンの音が聞こえてきた

どうやらミク姉はカイト兄の愛車で何処かに行つたようだ…

「え… 私だけ仲間はずれ？」

私は唾然としていた

「まだわからないの？」

レンは苦笑いしながら言つてきた

「え… うん」

そう言つとレンは笑いだした

「よくお菓子作つてゐるのにわからないの？」

「え… ？」

「ミク姉にお菓子よく教えてるくせにわからないんだ？」

レンはまだ笑つている

「～～～！ もう、いい加減教えてよ！！！」

私はそう言つてレンを思いつきり何度も叩いた

「痛つ！？」

わかつた、わかつたから叩くな！！！」

レンがそう言つたから私は叩く手を止めた

「ケーキが何？」

レンはまだ痛いのか私が叩いた場所を押さえている

「ああ… まあ、例なんだけどさ？」

パウンドケーキ…とかさ？」

「パウンドケーキ？」

私はますます訳が分からなくなつた

「だから、ロールケーキだつたら生クリームにマーマレードを使つとかさ！」

レンは呆れた顔で言つた

「…え？ ああ！ そう言つ事？」

出来る出来る！！！」

レンはさつきと変らず呆れた顔をしている

「何で気が付かなかつたの？」

「盲点だつた！」

そう言って一人でしばらく笑つてから
皆が帰つてくるまでのんびりしていた

ひじかわ・（後書き）

駄文でござません
後少しだすかね…
ん～：27日までこなは出来るのなら元結婚せたいです
…

電話（前書き）

サブタイトル「電話」にしたけどあまり電話は出ないです。
馴文ですがそれでもいいといつ方はぜひひそじ覽下さい

「ただいま」

あれ、ミクとルカは？」

メイコ姉がカイト兄と帰つて來た

どうやらカイト兄は先に自室に向かつたようだ

「お帰り、メイコ姉

ミク姉はカイト兄の車で何処かに行つたよ
ルカ姉はまだ帰つてきてない」

そう言つて俺は読んでいた本を閉じた

「おい、リン起きろ

メイコ姉とカイト兄…帰つて來たよ？」

リンは俺が本を読み始めてしばらくしたら
俺の肩に頭をのつけて眠つてしまつたから
俺は身動きがとれなかつた…

「ん…レン何？」

リンは目を覚ましたが少し寝ぼけている

「だからメイコ姉とカイト兄が帰つて來たつて

「リン、おはよう」

俺が言つた後にメイコ姉は何故かクスクス笑いながらリンに声をかけた

「え？……ああ、お帰り」

リンは軽く目を擦りながら返事をした

「ただいま

荷物とか置いてくるからカイトにアイス盗まれないようにな？」

メイコ姉はそう言つとリビングから出て行つてカイト兄が來た

「ただいま、リンちゃんレン君

外に僕のエイトがいなかつたけどミクが乗つて行つた？」

どうやら帰つて來たら何時もある愛車がなくて気になつたようだ

「お帰り、カイト兄

うん、ミク姉が乗つてどつか行つちやつた」

リンは伸びをしながら言つた

「そつか…

エイトの空気圧とかチョックしたかつたんだけど」

しょうがないな…そう言つてカイト兄は台所に向かつた

「…………カイト兄何しょつとしてんの」

俺がそう言つとカイト兄は冷凍庫に伸ばす手を止めた

「…駄目?」

「駄目に決まつてるだろ!」

メイ」「姉に言われてるんだから」

カイト兄にそう言つと

「めーちゃんの意地悪…」

ボソッと言つて手を引っ込めた

「レン~?」

携帯をつきから光つてるけどー?」

リンに言われて携帯を見ると

電話がかかっていた

携帯を開いて画面を確認すると「ルカ」の2文字

「もしもし…」

「あーレン君

ルカです。」

「ルカ姉

…どうしたの」

「さつき空港に着いたので

これからミクちゃんと帰ります。」

「…え?」

ミク姉そこにいるの?!

「ええ…飛行機に乗る前に連絡して来てもらいましたけど

ミクちゃんに代わりましょうか?」「いや、別にいい

わかった、ミク姉に気を付けるように言つとこで「わかりました。」

ルカ姉がそう言つて通話が切れた

「……2時間も何してたんだ?」

俺は携帯を見ながら呟いた

「どうしたの?」

ルカちゃん何て?」

リンは不思議そうに聞いてきた

「いや、何でもない

ルカ姉とミク姉もうしばらくしたら帰つてくるって
携帯を閉じながらそう言つと

「本当に?」

お土産何かな~」

リンはリボンをパタパタさせながら笑つていた

1. 飯（前書き）

駄文ですのでそれでもいいところの方はどうぞ一見ください
では、よろしくお願いします。

「……帰ってきたかな？」

レンはそう言つて台所に向かつた

「何でわかるの？」

レンに聞いてみると

「耳澄ましてみれば？」

そう言つたので言われた通り耳を澄ましてみると外から色んな音が聞こえた

(これが何?)

私がそう思つていると

「ああ……そんなに遠くはないね

もうすぐ帰つてくるね」

カイト兄が私と同じように耳を澄ましている

「?」

レンもカイト兄も何でわかるの?」

今度はカイト兄に聞いてみると

「リンちゃんはエイトの音つて覚えてる?」

カイト兄は微笑みながら聞いてきた

「え、音?」

私がそう言つと玄関の方から車のエンジン音とルカちゃんの声がした

「ただいま帰りました」

ルカちゃんは笑つて帰つて來た

「ルカちゃんお帰り!」

ミク姉は?」

そうルカちゃんと聞くと

「ミクちゃんはカイトさんの車を入れてますよ?」

私は荷物を置いてきますね?」

そう言つてルカちゃんは自室に行つた

「ふう…予想より早く着いたね」

そう言いながらミク姉が戻つて來た

「ミク姉…2時間も何してたの？」

レンが台所から戻つて來た

「え？あ～」

ルカちゃん待つてゐる間に色々お店とか見てた

あ！カイトお兄ちゃんこれエイトの鍵」

そう言つてミク姉はカイト兄に鍵を渡した

「え？ありがとう

ミク、エイトに乗つて違和感とかあつた？」

カイト兄は鍵を受け取りながらミク姉に色々聞いている

「……レン、あれ長引きそだからルカ呼んで来てご飯にしようっ！」

メイコ姉がテレビのニュースを観ながら言つた

「え？あ…わかった」

レンはそう言つてルカちゃんを呼びに行つた

しばらくしたらルカちゃんとレンが戻つて來たからご飯になつた
まあ…言つまでもなくスープカレーを食べて
初めに叫んだのはカイト兄

「辛 い！！！」

(カイト兄…ごめん)

そう思つて私は台所からラッシーを持って来て

「ごめん、カイト兄

これ甘いから少しは楽になるとと思つ

私は少しショーンとしながらラッシーが入つたグラスを渡した

「だ、大丈夫

ありがとう」

そう言いながらカイト兄はグラスを受け取つた

「確かに何時もはルカがカイトに合わせて作つてゐるから

たまには辛いカレーもいいけど辛いね…」

メイコ姉も少しだけ咽ていた

私とミク姉は調整前の物を一度飲んでいたのであの時よりは喉がましだった

レンはレンで平気そうに食べている

(レンって意外と辛いの大丈夫なんだ?)

そう思っていたらレンが咳き込んだ

レンは若干涙目で口を押さえている

(それでもなかつたか…)

あ! そういうえばル力ちゃんは?

そう思いル力ちゃんを見ると笑いながら食べていた

「ル力ちゃんは辛くないの?」

私はラッシーを飲みながら聞いてみた

「え? ええ、私は辛いものは好きですか

まだ辛くても平気ですよ?」

そう言いながらル力ちゃんは笑ってカレーを食べていた

(え……レンから聞いてた以上にル力ちゃん強い)

そう思いながら食べて皆が食べ終えた後

レンは洗い物を終えて冷凍庫から買ってきたかなり大きいアイスを

カイト兄に渡した

カイト兄以外はル力ちゃんのお土産の紅芋タルトを食べていた

皆と話していた時

ポケットに入れていた携帯にレンからメールが着た

「ル力姉によるこんでもらえたみたいでよかつたな?

でも、もし今度また作る時は加減しろよ?」

そうメールには書かれていた

「レン、ちょっと散歩に行こう?」

携帯を閉じて紅茶を飲みながら本を読んでいたレンを散歩に誘った

「え？まあ、いいけど…」

レンはそう言つと紅茶を飲んで本を閉じて立ち上った

「じゃあ、少しレンと散歩してくるね？」

メイコ姉にそう言つてレンと玄関に向かつた

「もう暗いから一人とも気を付けないと駄目だよ？」

後ろからミク姉の心配そうな声がしてきた

「大丈夫！行つてきま～す！」

ミク姉にそう答えてレンと家を出た

1. 飯（後書き）

車はそれぞれエンジン音が違います。
は知っている人が多いと思いますけど
私の兄のエイトは…正直煩いです
近づいてきたらすぐに分かります…
車はちゃんと点検してくださいね？危ないですから…
次話で終わらせます。

散歩と手紙（前書き）

最終話です…

何か…もつべだぐだです

何時もの事ですが…

それでもいいところはひとつでもいい範囲で見てください。

よろしくお願ひします。

リンは楽しそうに俺の前を毎晩と回り歩いていた

「リン、どうかしたの？」

俺は不思議に思ってリンに話しかけた

「レン、メール送ってきたでしょ？」

返事をどうしようか迷つたから

一緒に散歩にでも行つて返事しようかなと思つただけ

リンは笑いながら答えた

「何で？」

「内緒！」

兎に角！レン、今日はありがとう

そう言つてリンは公園の中に入つていった

憶えてるよ？」

そう言つてリンと俺はその木に近づいた

「ずいぶん大きくなつたねえ？」

リンは木を見上げながら言つた

「確かに…4年の時だつたつけ？」

この桜の木の下にお互いの手紙を埋めたの

そう思つて俺は木の根元を見た

「そうそう！」

この木だけ他と違つて少し小さかつたからここに埋めたんだよね？

お互に宛てて書いた手紙を小瓶に入れて

リンは笑いながら言つた

「掘つてみようか？」

俺はリンにそう言つてみた

「え、手紙を？」

リンは驚いた顔をして聞いてきた

「別にあの時に何時出すか決めてなかつたし二十歳の時に出そとかそんなんじゃなかつただろ？」

「まあ… そうだけど

……でも、どうやって掘るの？」

「さつき砂場に誰かが忘れて行つたスコップがあつたからそれで大丈夫じゃないかな？」

土も少し水分を含んで湿つてゐみたいだし

「じゃあ…出してみよっか？」

リンが笑つて言つた

俺はスコップを拾つてきて手紙を埋めたと思う木の根元を掘り始めた

「なかなか出てこないね？」

リンは少し心配そうに言つた

「もう少しじゃない？」

あの時、だいぶ深くまで掘つたから…」

俺はそう言って黙々と土を掘る

「でも、もしこのまま出て来なかつたらどうするの？」

珍しくリンがマイナス思考になつっていた

「大丈夫だつて

そろそろ出でても…」

俺がそこまで言うとカツンとさつきとは違う音がした

「リン、ここいら辺に携帯で光を当ててくれる？」

「え？う、うん」

そう言つてリンはポケットから携帯を出して

俺が言つた場所を照らしてくれた

すると土と違う物が微かに見えた

俺はスコップで周りを軽く掘つてから

その後、手で慎重に掘つていつた

「あ…」

掘つていくと小瓶が出てきた

それを取つて穴を埋めてから

公園の水道で軽く土を落とすと中に紙が入つていた

「……リン、開けてみる？」

一応、リンに最終確認をしてみる

「う、うん」

リンがそう言つたのを確認して小瓶の蓋を開ける

「なつ！かつた…

うぐつ…」

蓋が回らなくて思いつきり力を入れてみた

「レン、大丈夫？」

リンは心配そうにしている

「大丈夫！も、う…ちょっと…！」

カポッと音を立てて蓋が動いた

蓋は少し動いた後はあつさり開いた

蓋を取つて手紙を中から取り出して一枚をリンに渡した
「たぶんこっちが俺がリンに宛てて書いたやつだと思つ
俺は手紙をこんな風に折らないから…

もし、間違つてたらごめん」

「たぶん間違つてないとと思つ…

ありがとう」

そう言つてリンは手紙を受け取つた

リンが手紙を開くのを見てから俺も6年前のリンからの手紙を読んだ

未来のレンへ

未来のレンは憶えてるかわからないけど
2年生の時に家に帰る途中でいきなり私に告白してくれたよね?

「僕はリンが大好きだから
僕はリンのそばにずっとといふ!
だから、リンも僕のいっしょにして?
約束だよ?」って

あれ、すごいうれしかつたんだよ?

あの時は何にも言わなかつたけど

未来のレンにならあの時の返事を言つてもいいかなあ?と思つて

レン、私もレンの事が大好きだよ?

私はレンが側にいて欲しいし

私もレンの側にいたいよ?

ありがと、レン

…こんな事もう言わないからね?

リンより

「 「」」

リンからの手紙を読んだ瞬間

俺は顔中が真っ赤になつた気がした
チラツとリンを見てみると同じ様に顔を真っ赤にしている
リボンもよく見てみると少しフニャつとなつて
微妙に氣のせいだと思つけど赤くなつている

「えつと.....リン?」

俺がリンの名前を呼ぶとリンはピクリと反応した

「な、何?」

「俺...さ

手紙に.....何書いてた?」

そう俺が聞くと

「え!そ、その...あの

わ...私は?」

リンはさつきより顔を赤くして聞いてくる

「えつ!...そのあの、えつと」

俺もびづう答えていいかわからなかつた

「レン...い、言わなくてもいいかな?」

「うん...俺も言わなくていい?」

「うん...」

「とりあえず...もう遅いから帰ろうか?」

そろそろ//ク姉が心配するし...」

そう言つてお互に真っ赤な顔をして歩き始めた

「レン...手繋いでもいい?」

公園を出て少し歩いたところでリンが言つてきた

「うん……こ……」「あ

そつ言つてリンの右手を握つた

「ありがと……」

リンがボソッと言つた

（…リンの反応で俺がどんな手紙を書いたか何となくわかった気がする

この予想が当たつたらめっちゃ恥ずかしい…）

（もし…私の予想が当たつてたとしたら

私…凄い事言つてない？！

そう考えると何か…凄く恥ずかしいよ（

それから俺とリンは手紙を持つて無言で家に帰つた

散歩と手紙（後書き）

長い間読んでくれた方ありがとうございました！
秋くらいに書き始めてもう年の瀬ですよ！
どれだけ書くの遅いんでしょうか..
レンガリンに書いた手紙の内容は...
読んでくれた方のご想像にお任せします。
読んで下さり誠にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979o/>

鏡音の休日

2011年1月2日17時03分発行